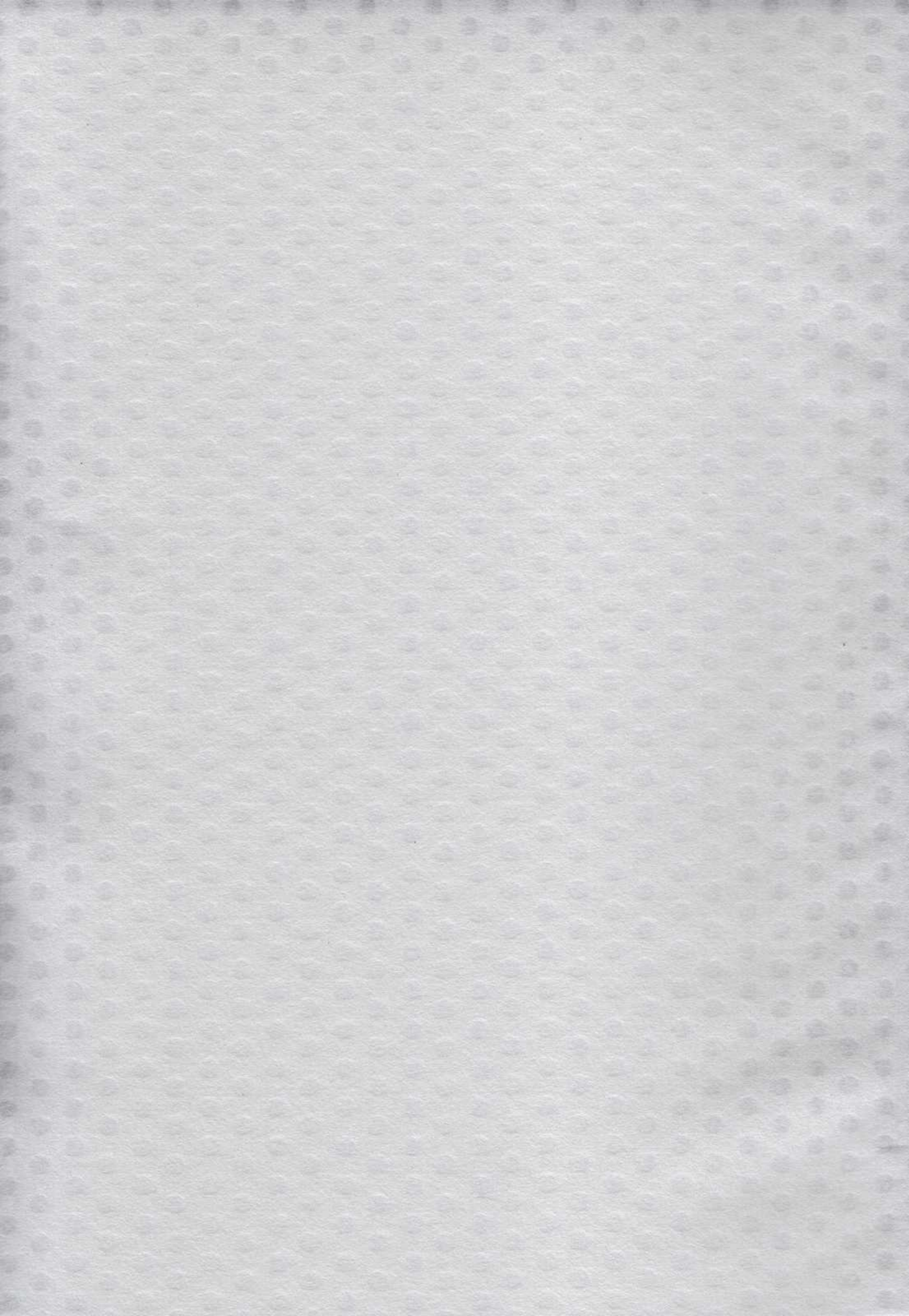




# TAXXEVES

**DOJIN**  
**R18**  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止









**タクメル**



「唯先輩！ここって……！！」

「や、ラブホテル♪」

「もう部屋じゃ出来なくなっちゃったし」  
「そう…ですけど、でもっ///こんなところ…///」

「久々なんだし…さ。それにあずにゃんにちよつとした  
衣装を用意したんだよ～？」  
「せ…先輩が喜んでくれるなら…。」

「じゃあ中に入ったらコレ付けてね」



ううー…  
こんなはずじゃなかったのはい…





先輩…っ  
あんまりこつち  
見ないで…下さ…っ

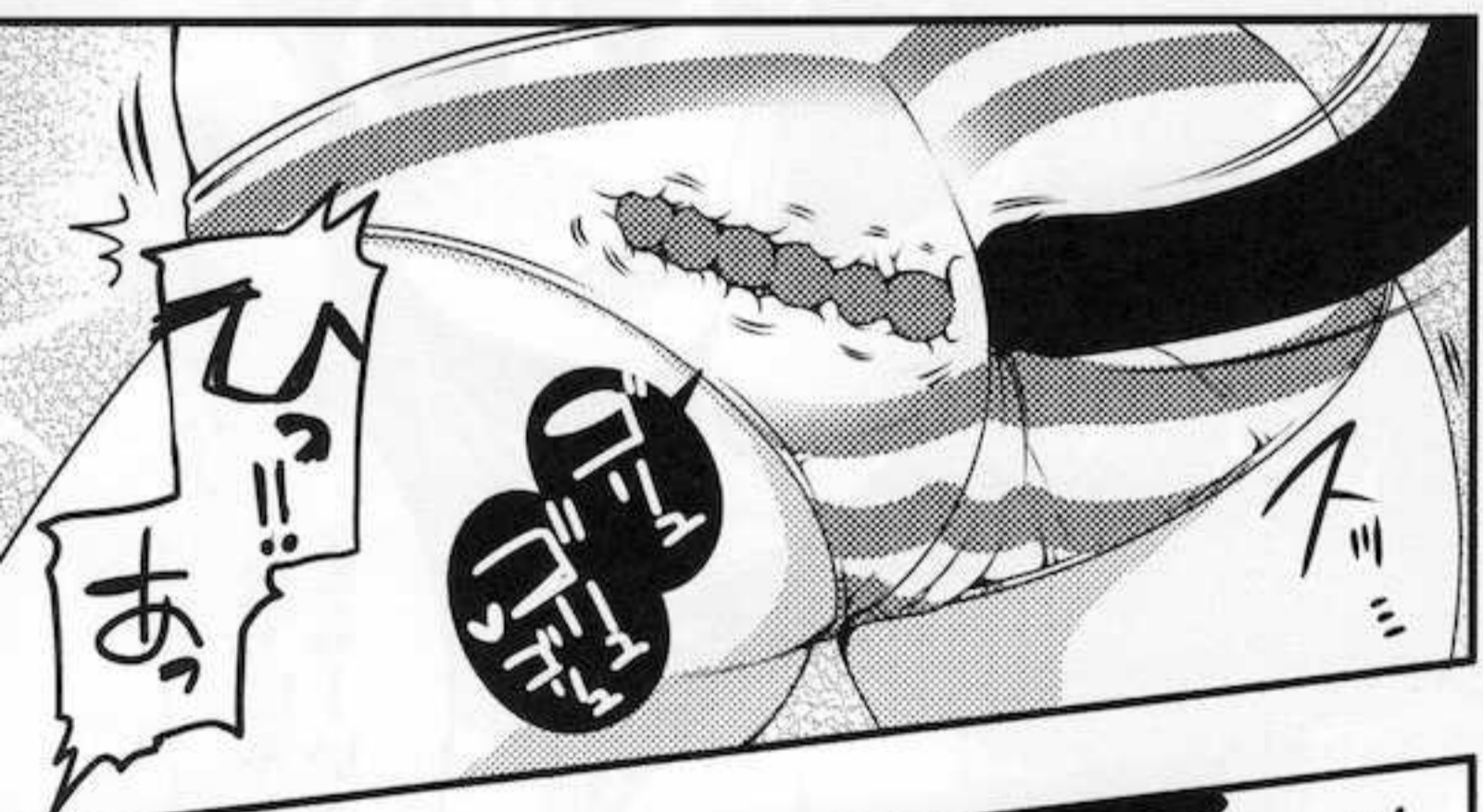
こんな…  
恥ずかしいかつこ  
だなんて…

思ってたま  
せんでした…

それに…

何し…  
おしりの  
ムズムズする…!!

おしりの中  
ムズムズする…



あ…

05



あずにゃん  
そのまま  
こつちへおいで

は…っ

キー…



このままじゃ  
歩けませ…んっ

おしり  
気持ち悪いよお…



ほら  
あずにゃん頑張つて  
私のとこまで来て

はっ...せんばあい

おしり...

気持ち悪いのに  
おちんちん勃起  
しちゃってる...

よろ...  
よろ

唯先輩が見たら  
幻滅しちゃうかな...

唯先輩まで...

あと...

少し...

よく辿り  
着けました♪

あずにゃん  
えらい♪

ふにゃあ...

唯先輩の  
ばかばかあ!

こんな意地悪  
やめてくださいっ

おしり





あつ！  
あずにゃんの  
可愛いおちんちん  
おつきくなってる？

あつ

これはあ



ほんと  
恥ずかしかつたん  
ですよっ…もうっ

はあ



唯せんぱいが  
あんなにかっこ  
させる…

しま



あずにゃん  
おしりを感じ  
ちやつた？

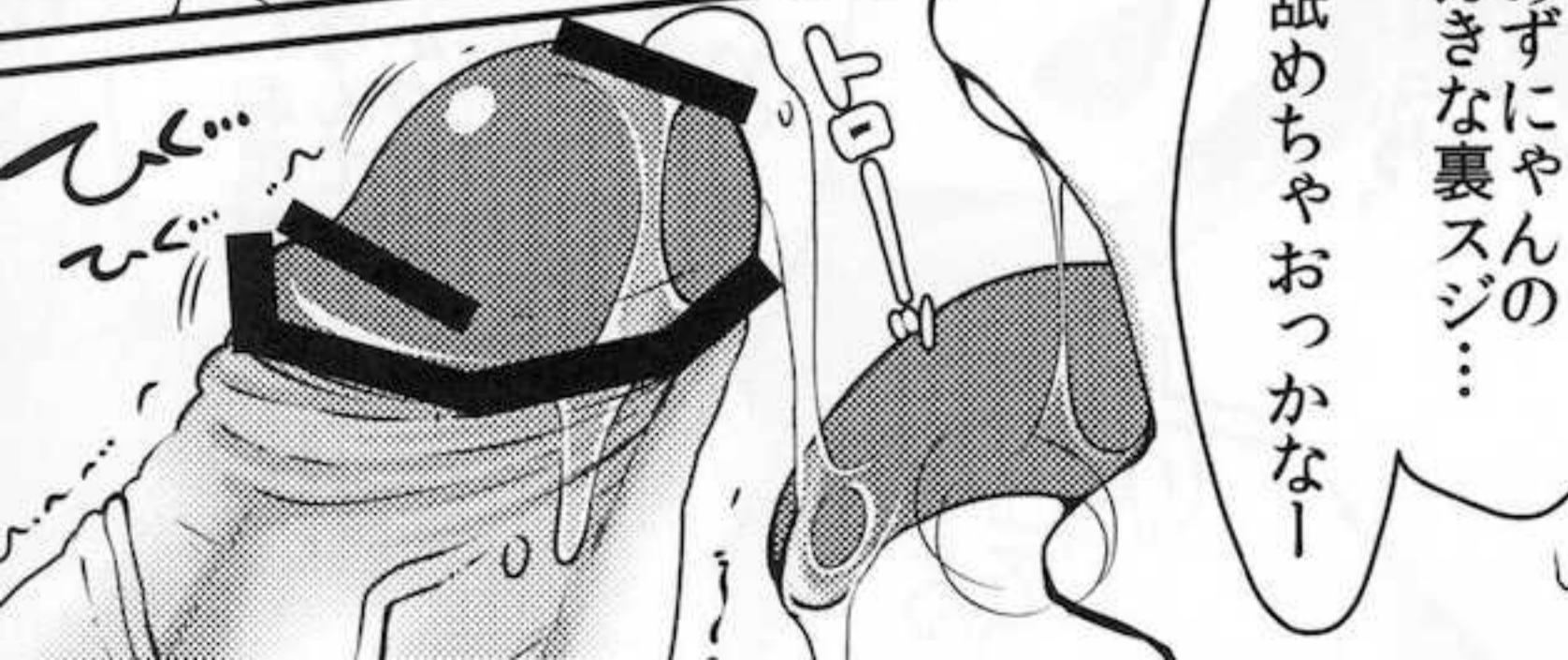
それとも…  
私に見られてた  
…から？

はあ



ふふ♡  
舐められたと  
思っただのかな？

あれ…？  
舐められて…ない？



あずにゃんの  
好きな裏スジ…  
舐めちやおっかなー

はあ



感じる時に  
『にゃんにゃん』  
つて言ってくれたら

ぽぽ

ぽぽ

舐めてあげる♡

あーん

あずにゃん

感じる時は  
にゃんにゃん  
…でしょ？

あーん

あーん

あーん

あーん

こんなにお尻が  
好きだなんて  
知らなかったよお

あずにゃん  
かーわいい♡

あーん

あーん









あずにゃんの  
みるく…  
すつごくおいしい

あずにゃん

あずにゃん

ひよんなに  
吸つても  
もう出まひえん  
よう…

…ミ

あずにゃん

あずにゃん

あずにゃん

あずにゃん

さつきから  
私ばかり!

ごめんね…

ただあずにゃんを  
気持ちよく  
させたくて…

私だって…

モジ…

モジ

先輩はほんと  
何もわかってないですつ!

私だって唯先輩を  
気持ちよくさせたい  
んですよ…?





あずにゃん...♡

あずにゃん♡

あのね

あずにゃんが  
コレを付けて  
くれたら

嬉しいん  
だけどな

これつけたら  
先輩を気持ちよく  
出来るんですか？

でも、これだと  
また私だけ気持ち...

あずにゃん

あずにゃん

すっく  
気持ちよそ♡

おちんちんの  
先っぽがピンピン  
きてますうううう

すっくうううう  
きもちいい  
ですうううう

その玩具  
付けながらね

ううう!!

ON!

びびり

びびり



私のおまんこに  
挿れてほしいの♡

せんぱあい…

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

お尻もおちんちんも

あずにゃん…  
一緒にたくさん  
気持ちよくなる？

気持ちいいまま…

あずにゃん  
はやくう…

先輩のおまんこに  
挿入しちゃうなんて



先輩の腔内…

あーん、あーん！！

あーん、あーん

上下に揺れて…

気持ちいい所に  
コンコンツて  
あたるよおおおお

あずにゃんのおちんちん

バイブみたい！

あ

あ

…せ…んぱあい  
わた…し…

こんなの初めて  
れすう…あつ

あ、あ、あ

私もだよ  
あずにゃああん

あ

あ

あ

あ

あ

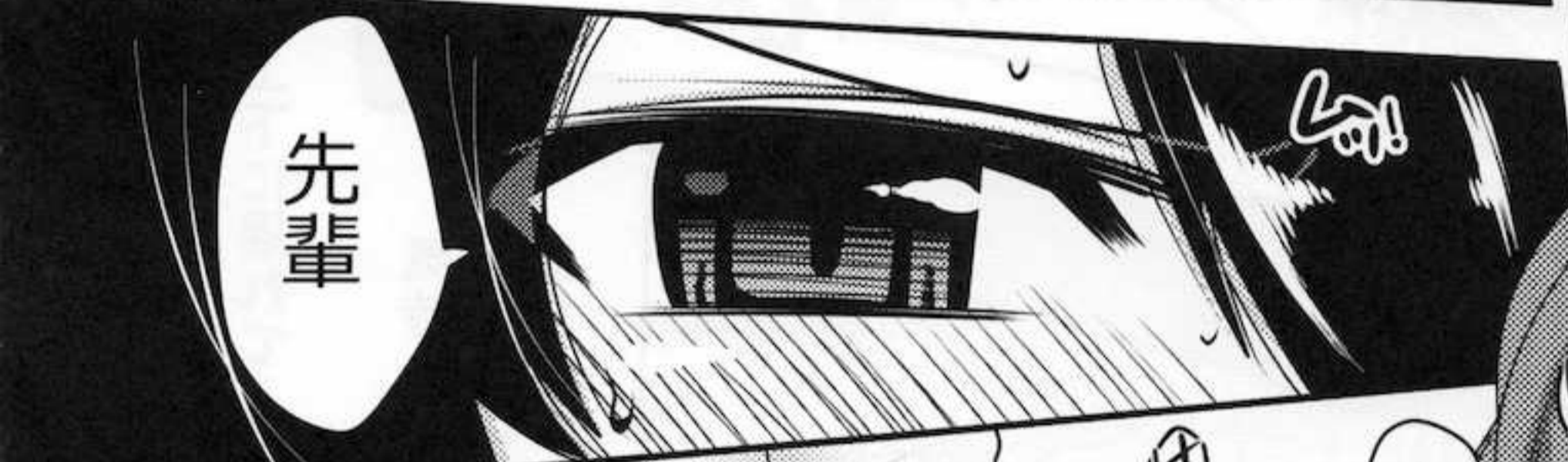




せ・ん・ぱ・い  
バイブなんか  
使ってたんですか？

バイブなんかじゃ…  
もう、満足できないよぉ♡

え？  
あ  
あずにゃん  
それは…



先輩



あず…  
にゃん？

お仕置かたか…!!!





私が先輩の  
おまんこを

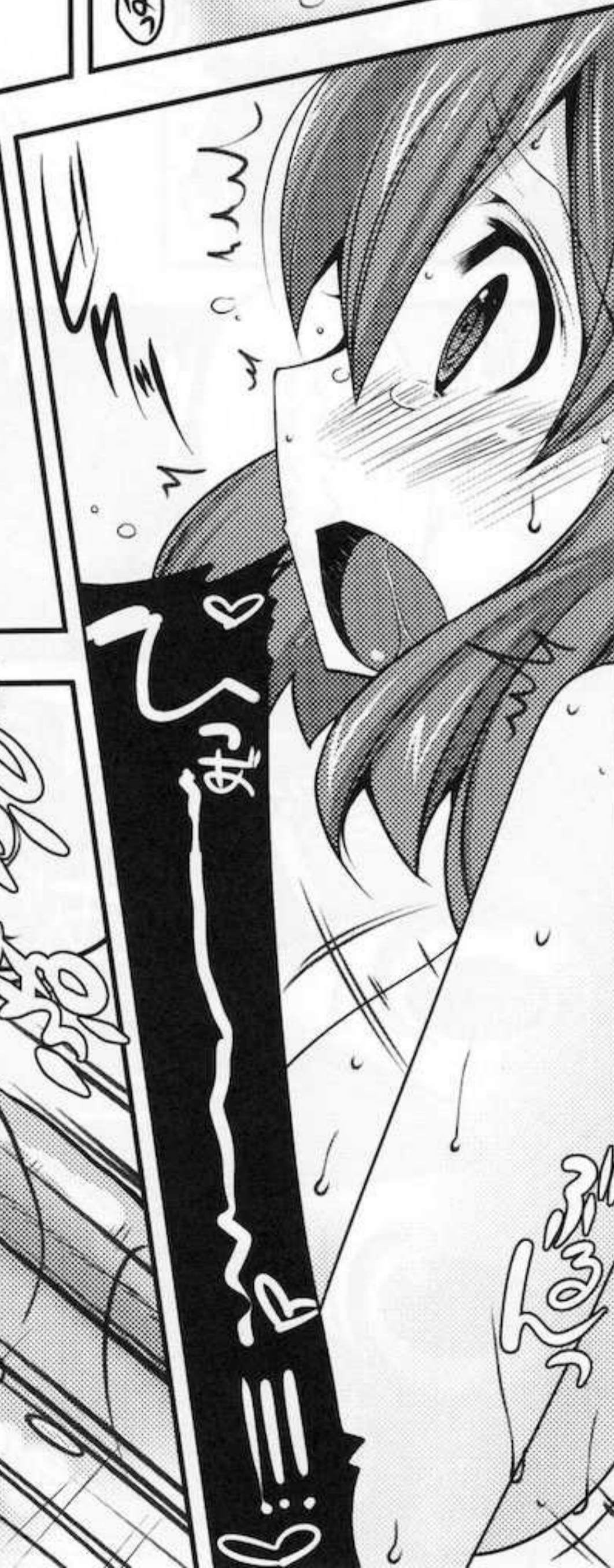
満足させて  
あげますっっ！



もうバイブなんか  
使わないで  
いいくらいっ！



先輩は激しいのが  
好きなんですわね



もっともっと  
激しくして  
あげますっ！







ポ  
ン

これで先輩は

私のペットです

あずにゃん...♡



感じる時は  
猫の鳴き声ですよ

せんぱいっ





唯先輩…かわいいっ  
可愛いですっ!

先輩のそんな  
姿見たら…私、もう  
我慢できませんっ!







新学期が始まってからというもの、まだ部員が集まらず、試行錯誤をしながら部員を集める為のパフォーマンスを考えているけれど、憂や純も楽器経験が無く、部員勧誘なんて未経験な為、どう行動すれば良いか分からずに進めていた。

山中先生の薦めで先輩達が着ぐるみを着て活動をしたいのでやってみようとは思ったけれど、こんな着ぐるみを着て勧誘するくらいなら他で勧誘したほうがいいんじゃないのかと考えてしまい断ってしまった。(案の定、先輩は勘ねてしまったけれど……)

「はあ……もうすぐ新入生歓迎会なのになあ……」  
放課後、部室から空を見上げながら私は呆然としていた。何故ならこのまま決まらなければまた『廃部』の文字を叩きつけられる。そんなのあんな先輩達だけ築き上げてきた歴史を壊してしまうのと同然だと思っっているからだ。

「……あつ、ちよつと熱くなりすぎた……私ったらもう……」  
頭をクシャクシャしながら、自宅に帰るため歩き出した。

\*

自宅へと帰宅した私は荷物を置き使い慣れたベッドへ勢いよく腰掛けて眠い目を擦りながら結びなれたツインテールを外し艶やかな黒髪を櫛で梳かす。

どうするかと考えながらあたりを見渡す……ふと頭の中に「ねえねえ……あずにゃん」と小動物のようにじゃれてくる唯を思い出した。

「あああつ……もうつ、唯先輩……考え事していたら違うこと考えちゃうじゃない」

「そうだ、唯先輩なら何かいい案が」

その時、何故先に聞けなかったのだろうと後悔した。

私はカバンに入っていた携帯電話を取り出し、着信履歴から唯先輩の電話番号に連絡した。

『……………』

「あ、もしもし……唯先輩今大丈夫ですか？」

「やつほらあずにゃんどうしたの？」

「部員が思ったように集まらなくて……唯先輩にコツを教えてくださいませんか？」

「えーコツっていつでも何もやってなかったし……」

「あ、そうだ……ちよつとまって」

唯先輩は「ゴソゴソと何か探し物をしているようで何やら騒がしい音が受話器から聴こえてくる。

「何か探し物ですか？電話切ってもう一回かけましょうか？」

「あ、大丈夫……見つけたから大丈夫だよ」

「あのね……この前大学に行く時に道で配っていたポケットティッシュにねいいバイトがあつてさ、あずにゃんも勧誘するの上手くなるんじゃないかなあつて思っただけ。あ、もちろん体験バイトからあるんだ」

「どんな、バイトなんですか？」

唯先輩いわくバイトの内容は『可愛い衣装を着ているんなら男のお客様が希望するシチュエーションを演技しながらお喋りをするバイト』との事。前に変な薬をかけられて身体が変化したことがあるから唯先輩に誘われることは不安ではあるがお金も入るわけだし、『可愛い衣装』という文句に若干惹かれる所もある。

唯先輩にバイトを引き受けると連絡を取った所、明日の授業

が終わってから駅前で集合との事。アバウトと思ったが唯先輩の事だからと許してしまうのだった。

\*

朝になり今日はバイトの体験もあるため、いつになく身だしなみに精が出る。いい香りがするスプレーでも忍ばせておくかと思っただが時間を見ると余裕なし……。

「うわ……遅刻遅刻」

「はつ、もう唯先輩の性格が移ったのかなあ……」

そんな最悪で少し恥ずかしい朝を迎えた私はいつものように授業を受け、ようやく帰宅時間になった。

「……」

帰宅するために準備していると携帯のバイブレーションが服のポケットで震え出す……自分の着信だと気が付くと即行で電話を出ると唯先輩からの電話だった。

「あ、もしもし……唯先輩ですか？」

「あ、あずにゃん……もう終わった？今、近くに居るから早くきてえ」

唯先輩にわかりましたと伝えると私は学校を飛び出し唯先輩に逢いに行った。

\*

駅前でブリックバックのジュースを飲みながら携帯を弄っている良く見たことがある女性をすぐ見つけた、唯先輩だ。

私は近寄りながら声をかけた。



「はあはあ、唯先輩、遅くなりました」

「あつ、あずにゃん！ちようどメールを送ろうと思っていたところだったんだ」

「タイミングが良かったみたいですね」

「あずにゃん、疲れたんじゃない？はい、お茶買っておいだからあげるよ」

「わっ、ありがとうございますー！」

買ったお茶を口にする。気が利く唯先輩なんて今日の先輩はいつになくお姉さんに感じた。若干不安な気持ちがあったのだが唯先輩のおかげで少し和らいだ。

「じゃあ場所移動しよ、バイト先に移動するからさ、今日来て下さいって言われたんだ」

電車に乗り、バイト先まで進む……俗にいう繁華街と言われた場所。だけど、人が無い路地へ入っていく……。

「先輩……どこに行くんですか？」

「もうすぐ着くよ、ええと次を左と……」

唯先輩は地図らしきものを携帯で確認しながら私を連れていく、そして着いた場所はとあるラブホテルらしき建物だった。バイトに行くはずがどうしてこんな所なのか皆目解らなかった。

「……って、ラ……ラブホテルですよ？どうしてこんな所なんですって？」

「えへっ、今日はここが私達のバイト先なんだよ」

私は唯先輩の身体を揺さぶりながら言つと唯先輩は笑顔のまま話してきた。

「だってえ、ホントの事言ったらあずにゃん絶対来てくれないっ

て思ったんだもろん」

唯先輩はそれから淡々と説明をしてきた。バイトの内容は可愛い服を着ながらお客様にセックスを提供するといった内容だった。

「そ……そんなの……私を騙したんですか？」

「騙すつもりなんて無かったんだよ、だって……あずにゃんが勧誘上手いきますよーにっと思つてたからさ」

私は一瞬涙が出そうになった……信じてたはずの唯先輩だったのに……。

ふと、唯先輩を見上げると私の頭をそつと撫でてくれる先輩の手がそこにあつた。

「大丈夫だって……それより……下半身は大丈夫？」

「えっ……か……下半身？」

私はスカートに目を向けるとそこにはまた……あの感覚……。

「もしかして……きやあつ！」

そこには、女性のクリトリスが膨張し男性の陰茎が私の身体に出来上がりつつあるのを発見した。

「ふふふん、効いてきたみたいだね。このバイトはふたなり優遇なんだよねえ、あ、外だから静かにね……」

「……これって……またあの薬を……」

「さっきのお茶に入れておいたのが効いたみたいだね。約束の時間だから入るよ……来て」

言いたい事は山ほどあるのに、そんな事も言えずに私は下半身をカバンで押さえながらラブホテルに入室した。

号室が書いてある鍵を手にし私達は確認し中に入る。

「ここがお客様がいる部屋……入るね」

「は……はい」

失礼しますとドアを叩いて入室すると、そこには年配のおじ様が一人、ベッドで下着のみで座っていた。

「こんにちは、今日は3Pでお願いしますよ。可愛いね、緊張しないでこっちに座って……」

「は……い……ほら、あずにゃんも……」

薄暗い部屋にちよこんと座る……そうすると男性は舐めまわすように私を見てくる。

「名前は唯ちゃんと梓ちゃんだと聞いているけど……合ってるかな？」

「はいっ、合ってますっ」

私は緊張しているのか硬直しながら言った。そうすると、男性は私の横に座って脚を触ってきた。いきなりこんなさされるとか聞いてない……唯先輩以外に触られたことなんて無いから緊張してしまう……。

「制服は自前みたいだね……可愛いなあ……おや？この子はチンポを生やしているみたいだね」

「……この子のおちんちんは自前なんですよ、お、凄いですよねえ」

「唯ちゃんだったよな……恋人同士みたいに制服で三人で変わったエッチしたいなあ……俺が持ってきたこの制服に着替え

てくれるかな？」

「はい、これだね、わあ、可愛いなあ」

男性が持ってきた制服を手にし、唯先輩が躊躇いもなく服を脱ぎ替えている。見ているこっちが恥ずかしい。



恥ずかしさが下半身を刺激し膨張してくる。顔を赤らめて座っている男性が私の下半身に手を伸ばしてきた。

「へっ……ふたなりかあ……いいなあ……上物だけ……気持ちいいんだろ？ミニスカートのたくし上げられるくらい勃起させてやる」

「ひゃんっ……ダメっ……ですっ……」

「こんなになってまで言うのか？口よりチンポは正直みたくない……へっ……おまけに胸も制服の上から乳首の形がわかるぜ」

私の耳元で男性が囁いてくる……耳に吐息がかかると嫌だと感じているのに下半身が反応してしまう。止まれ、止まっと思っているのにそう考えると逆に感じてしまう。

「あずにゃん〜おまたせえ〜制服の準備出来たよん」

「おお〜唯ちゃん〜可愛いなあ〜」

「へっ、久しぶりに着たけれど結構シツクリくるんだよね」

制服に着替えた唯先輩が私の前にいた。それは数ヶ月前に見た先輩によく似ていて懐かしく思えた。唯先輩ったら恥ずかしそうなのに乗り気なので怖い。

「制服ガチで似合ってるよ……唯ちゃん……もう我慢できねえ……」

「もうっ……いきなりっ……んっ……んっ……はあっ……」

私の正面で唯先輩と男性がキスをした。それも舌を絡めて……ブラウスの上から胸を触って愛撫している。こんな光景を見たのは初めてだから恥ずかしくて目を伏せてしまいそうになる。

「はあ……はあ……もう……急にしちゃうから……ビククリ

しちゃうたよ……」

「ビククリしたかい？それは誤らないとダメだな……でも、唯ちゃん……下のおまんこは準備が出来てるみたいだぜ……」

「ん、あああ……ためえ……もう……強引だよ……」  
そうすると男性は唯先輩の膣口をショーツ越しに触り始め、それからショーツを脱がした。何が始まるの？こんなものずと見せ付けられたら私……我慢できなくなっちゃう……。

「はあはあ……唯……先輩っ……」

「ん？梓ちゃんも我慢出来なくなったのかな？チンポ汁とマンコのエッチな液でグチヨグチヨだぜ」

男性が私の目の前で脚を跨ぎ襲ってくる……そうすると、私の陰茎を擦りながら私の顔を舐めて手で身体の敏感な部分を刺激された。

「やっ……気持ちいいっ……ですっ」

「気持ちいいだけじゃあ……物足りないんだろ？ん？言ってるん？」

言って「らんって言われても……恥ずかしい……でも、自分の陰茎を擦られて気持ち良すぎて何も考えれなくなってしまう……」

「はあ……はあん……おちんちんがあ……」

「そうかそうか……これが欲しいんだね……俺のチンポが欲しいんだね……ほら……俺のもこんなにガチガチになってい

るんだ。梓ちゃん……ほら……啜えて……」

「ふあ……ふあ……」

男性の陰茎が私の口に入ってくる……こんな望んでいないのに……突きつけられた男性の陰茎を何故か夢中に啜えたい……

臭いニオイがする……いやらしい液全部飲みたくらい……欲

しくて欲しくてたまらない……

「あずにゃん……凄いなあ……こんなえつちな事……自らしちゃうんだ〜」

「くっ……梓ちゃん……凄く上手いよ……こんな可愛い子がこんな事してしまうなんてな。唯ちゃん……君が仕込んだのかい？」

「えーっ、私はなにもしてないよ〜それより……あずにゃんのおちんちんがプルプルして苦しそうだね……私が楽にしてあげるね……」

と、唯先輩は私の陰茎を胸で包み込み先端部分を優しく舐めてくる……よくは見えないけれど胸の膨らみと舌の感覚が陰茎を刺激されているのがよく分かる。

「ひゃあ……唯せんぱあい……」

「おおと……口が疎かだぜ……優しい彼女が自分のチンポを愛撫されて……善がっているんだよね……変態ちゃん……」

「へ……変態だとか……あんっ……」

「ふたなりなってる時点で変態だよ……ね〜そうだよ〜」

「そんなっ！これは唯先輩がっ！あああっ」

「梓ちゃん……なってるから言っても仕方が無いんだよ……変態で淫乱なんだ」

私……変態だったんだ……知らない男性の陰茎を激しく

啜えながら唯先輩に陰茎を舐められて善がっているなんて……普通じゃないんだ。

思えば思うほど感じてしまう……もう……我慢出来ない……

「わたし……わたし……あああ……もう……」

「いつちゃうの？びゅーびゅーっっっだしちゃえ……」



「くっ……俺も我慢できねえ……梓ちゃん……口に出すぞー！」

その瞬間、私の口の中に生暖かい粘り気のある液体が流れ込み、そして私の陰茎から我慢していた白濁液が唯先輩の顔面に大量にかかってしまった。

「うっ……ぶはあっ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「うわあ……すっこい……出たね……べとべともくん……あずにゃんす」

「梓ちゃんのチンポまだ痙攣しているみたいだぜ……まだまだ、物足りないみたいだな……へっ」

「うんうん、まだまだ……物足りないみたいだよねえ……私もおまんこの中におちんちんぶっ挿して欲しい」

愛液が滴り落ちるくらい大量に出来上がった膣口を見せ付けるように開け、指を出し入れをし自力で愛撫している。そして、男性は唯先輩の膣口を舐めたり触ったりしながら唯先輩を刺激する。

「あっ……ああっ……そこが凄いの……気持ち良すぎてフツ飛んでしまいそうだよお」

「唯ちゃんのマンコもチンポを欲しそうにしているな……ほら……梓ちゃんが欲しいのは唯ちゃんのこれだろ？」

「はあはあ……ほ……欲しい……ですっ……」

「ほーら……挿るぞ……」  
私の身体に唯先輩が乗って、ちょうど私の股上から陰茎を自分の膣口に挿入していく……生暖かい感触と滑りが私の身体に伝わってくる。

唯先輩はそれから上下に腰を降り、私を刺激してくる。

「あああ……気持ちいいのぉあずにゃんっ……やあ……」

「ゆい……せんばあ……気持ちいい……」

「はあはあ……これじゃあ……二人がいちゃいちゃしてるのを見ていただけじゃないか……俺も混ぜてもらっせ……」

すると、男性は私の身体を弄りだした……どこをどうするかは唯先輩が正面にいたので分からない……

「柔らかそうなアナルだな……いい具合に穴からもいやらしい汁が出てやがる……マンコよりも気持ち良さそうだな……」

私のお尻の穴に違和感を感じた。男性は私のお尻の穴に手を伸ばし指を挿入している。以前に唯先輩にされたきりなので緊張してしまう。

「おっと……穴を締め付けたらダメだぜ……折角の柔らかい穴が台無しだ……ほら……挿れるぞ……」

今度はお尻の穴からも刺激される……唯先輩の生暖かくて絡みつくような刺激とお尻の穴からの激しい刺激で狂いそうになる。どうにでもしてほしい。

「へっ……いつは凄いな……唯ちゃん……梓ちゃんのアナルも凄いぜ……マンコに挿れている感覚だ……もしかして……」

「性感帯なのか？」

「あっ……あんっ……あずにゃん……いいなあ……褒められてるう……あんっ……だめえ……」

「はあはあ……どうにでもしてえ……我慢出来ないうっ……」

「……」  
「アナルで犯されて気持ち良くなって、気が狂いそうになっているのかい？可愛い顔してト変態なんだな……」の淫乱」  
激しいピストン運動に気が狂いそうになりながら、自分の陰

茎を唯先輩に挿入し見知らぬ男性にお尻の穴を犯されている事を自覚しとんでもない事をしてる事をに恥ずかしさが増してしまつた私は、涙を浮かべながら意識が朦朧とさせていた。

「私、ト変態なんです！だからもうイかせてください……」

「はあはあ……とんだト変態だ……俺も梓ちゃんのアナルでイっつてもいいか？」

「ふあっ……あずにゃんのおまんこでイっつちゃうう……」

「お尻の穴に熱いせーえき、ト変態な私に流しこんで下さいああい」  
意識が吹っ飛ぶ寸前に私は唯先輩の膣内に我慢していた白濁液をたくさん流し込んでしまふのを感じ。そして、私のお尻の穴には生暖かい液体が直腸まで流れていくのを僅かながら身体で感じた。

「……」

「ありがとうございます……今日分のオプシオンはふたなりになりますので料金は割増になります」

「おかげでト変態プレイ出来たよ……梓ちゃんがこんな可愛いのにト変態だなんて、想像も付かなかつたぜ」

「褒められたねえ……良かった良かった」

「……ありがとうございます」  
「また、お願いするかも知れないけれど……宜しくね」  
思い巡らせば凄く変態なプレイをしたのだと思つた。セックス中の言葉や行動。どれを取っても恥ずかしい。恥ずかしいので

男性とは顔を合わせたくない。唯先輩は笑顔で対応している



のを見ると不思議だった。  
報酬を頂き、ホテルを後にする。

帰り道、やっと唯先輩と二人きりになれたので、今日の事等を話しながら歩いている。何の為にこんなバイトをさせたのか皆目わからなかったこともある。

「今日のバイトはこれでおしまい。お疲れ様」

「お疲れ様じゃないですよ！ふたなりにはなるし、知らないおじさんとエッチしちゃうし……」

「ムギちゃんから貰ったふたなりになる薬がね。まだ残ってね。どうしてもあずにやんに使いたくなって思ったの、嫌だった？」

嫌とかそんな事でも無く私は何故こんな破目になったのか、それと私が望んだ勧誘するコツを教えてもらおう件が無視されている事に対して不満があった。

「あの……唯先輩？コッして私には何のメリットがあるのでしようか？」

「そんなの、決まってるじゃん！勧誘するにはセクシーさも必要！それだけ」

「そ……それだけですか？」  
「それに、凄いエッチなあずにやんを見たかったからってのが本音かな？」

本音かな？とか軽く言われたがそれは嬉しい反面、苛立ちも多少はしたが笑顔で話している唯先輩を見るとそれも忘れてしまう。やっぱり唯先輩の事が好きなのだ。

「じゃあ、これで勧誘は出来るよねっ！応援してるから頑張っ  
てえ……」

アニメに出てくる絵のようにキラキラさせながら私にエール

を送ってくれる唯先輩を全く仕方がない人だと認めてしまう  
私もどうかと思うが正直言つと少し頼もしかった。

最寄の駅に着き、今日の報酬を頂き、家路へと帰宅した。

\*

数日後、新入生歓迎会が行われるため、私はギターを片手に一人でステージに上がり演奏による勧誘を行う事を決意した。憂や純はいるけれど、いかんせん楽器を弾く事が困難である事が最大の決め手であった。

あれから、変わった事と言えば、唯先輩とあまり会えないせいとか家に帰るとエッチした事を思い出してしまい、自分でお尻の穴を弄るのが楽しみになってしまっていた。

通販サイトで見つけたローターを買ってしまいお尻の穴に挿れて遊んでいる始末。いつしかローターを挿入して通学したりしてみたいとか、そんな願望すらうつつ芽生え始めていた。

今日も新入生歓迎会がある前日の朝なのにまたお尻の穴に刺激が欲しくなり、ローターで弄って二回もイってしまった。

「ま……まだ時間があるよね……外に行く前にもう一回……」

「お尻の穴にもっともっと刺激が欲しいの……」

「はあはあ……唯先輩のせいですよ……こんなにお尻の穴が好きになっちゃったんですから……ああんっ……」

そして、新入生歓迎会のステージが始まる……

「頑張ってね！あれ今日はいつになく色っぽいね」

憂が私にステージ前で話かけてくれた。何か感付かれたのかと思うくらいの中な事を発したので驚いた。

そう、今日は家でお尻の穴を弄るだけでは物足りなくてローターをお尻の穴に挿入してきてしまった。しかも、ショーツも穿いていない。もう後戻りが出来ない。

「はあはあ……そ……そうかな？？これなら勧誘上手いかな？頑張っってくるね……」

ステージへ走りだす……スポットライトに当てられて沢山の視線を感じる。こんな大変な行為をしながら立っている事を見つかったらどうしようかと思いつつながら、

お尻の穴の中で震えている快楽と視線を浴びる感覚を感じながら、演奏している自分に満足をし変態行為の道へと手を伸ばしてしまう私であった。



# アトガキ。

やっと出来ましたフタメタモル3 (さん)!!

スリーかさんで、あえて さん にしましたw

商業と平行で作業していたので大変でしたあ…

今回は前回とはガラリと変わり、らぶらぶ系なお話でしたが如何でしょうか?

逆にネコミミをあずにゃんが唯に付けちゃうお話が描きたくて、こんな感じになりました。

原稿中は風邪をひきまして、今も喉がつぶれてます…w

その上、肩がバッキバキに凝っているの、近いうちに人生初のマッサージ屋さんにふーかちゃんと一緒に行きたいな〜とか勝手に思ってます。(どうでしょ、ふーかちゃん) ←

…

……………

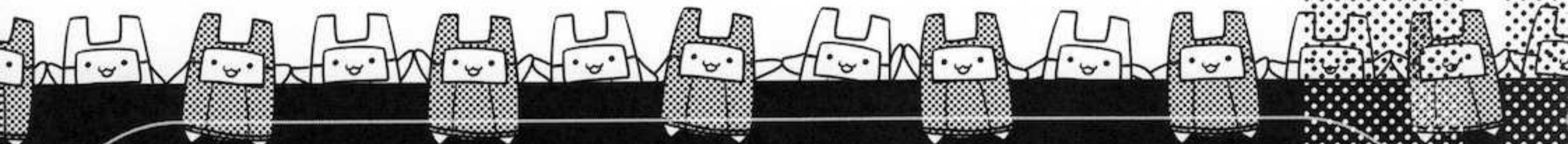
……………

やっぱり文章は苦手だっ!(・ε・`;)三三

2011・08月 雪路時愛 (ゆきじしあ)

<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>

商業もよろしくお願いします(o・ω・o)★



こんにちは。ゆいあず3作目であります。フタメタモル3 (さん) です。

さんはビックリマークは3つでお願いします (なんつつてね)

前作からの続き物ではあるのですが、事の経緯は新連載のあずにゃん編を読んだ所から始まりまして。

前々から考えていた「ふたなりちゃんのイメクラ」というのを交えて書いてみたいな〜と考えた結果。

こんな作品になってしまいましたが、いかがでしょうか?

書き上げてからというもの、アナルネタ中心になってしまっているなと思いました。

アナルネタは好きなので私得ではあるのですが… (おい)

やはり、あずにゃんは受身で書きたいんですよね〜嫌がりつつもやっちゃうみたいな感じ。

題名は純ちゃんの前ネタの歌手からです。だから何って感じですがw

大学編にも新キャラが出てきましたね。

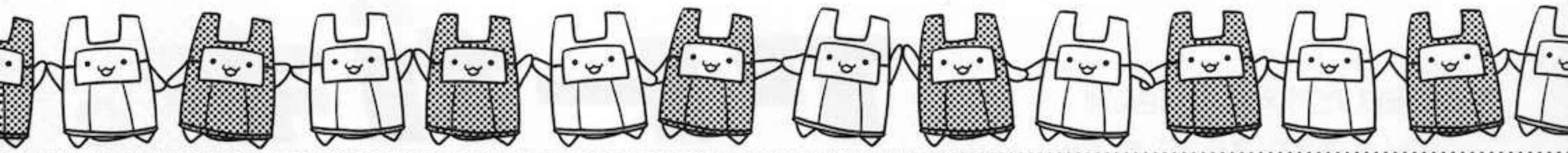
新キャラも元ネタの方がいるだろうと思いましたがトライセラトプスのメンバーさんの名前なんですよ。

夜中にニヤリとしながらパソコンの前で座っているふーかでしたw

お後が直しくならないうちに失礼します。ではでは、またどこかで。

2011年 8月 吉日 味燐ふーか♪ [http://blog.livedoor.jp/sora\\_san3/](http://blog.livedoor.jp/sora_san3/)





# 18歳未満閲覧禁止

本作品の登場人物は全て20歳以上です。

画像の転載、データ化、web等でのデータの共有はご容赦ください。

## 奥付

### ■ FAXメール ■

発行日:2011.08.14

イベント:ComicMarket80

発行:んーちゃかむーむー

著者:雪路時愛&味燐ふーか

HP:<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>

Mail:[n\\_cyak\\_mm@yahoo.co.jp](mailto:n_cyak_mm@yahoo.co.jp)

印刷所:大陽出版様





